

高等学校検定教科書分析から考える 関係代名詞の指導法 ～従来の指導法からの脱却と新提案～

宮 木 慎

1 はじめに

関係代名詞を研究のテーマにしようと思ったこと背景には、私が高等学校における教育実習で担当したライティングの授業の範囲が関係代名詞、関係副詞であったことにある。授業で関係代名詞を教えるにあたって、指導教授である久保野先生のアドバイスや、英文法や英語学の専門書にいたり、今まで学校で行われてきた指導法には不備があることに気づき、より深く研究したいと考えて、関係代名詞を研究のテーマに決めた。

関係代名詞は生徒にとって難しい分野であるが、それを習得させるために、先行研究で今までどのような教え方がなされてきたか、つまりどのような役割であると教えられてきたか、そして現在どのような役割であるべきといわれているかを調べた。また、生徒が関係代名詞を習得する際にどのようなタイプの文が苦手であるかを調べた。そして生徒が苦手とする関係代名詞の文パターンの実態を調査し、その結果と検定教科書の分析をもとに生徒が関係代名詞を習得するために不足しているものは何か、また、どのようにすれば生徒が関係代名詞の役割を誤解することなく理解できるのかを過去の研究を参考に、実際に授業で用いることができるような提案をする。

2 関係代名詞の指導についての先行研究

2.1 関係代名詞の指導法

中岡(2006)によると従来、関係代名詞は「2文連結」として教えられてきた。実際、様々な文法の参考書を見ても、「2つの文をつなぐ役割を果たす」というような解説が多い。このような解説をすると、生徒は関係代名詞をどのように理解するのだろうか。

では、まず関係代名詞を2文結合で教えるとはどのようにするのかについて言及する。佐藤(2005、p.24)では、次のような例を用いて関係代名詞を説明している。(下線は引用者による)

Look at the man who is standing over there.

佐藤(2005)では、この典型的な関係詞を用いた文を用いて、関係詞の基本概念を探るとしている。佐藤(2005)によると関係詞を用いた文は、すべて、2つの文が結合したものである。言い換えれば、文という2台の車両が、関係詞という連結器によってつながったものであるとし、関係代名詞は2文結合であると強調している。さらに、佐藤(2005)では、関係代名詞は接続詞と代名詞を合わせたものであるとし、関係代名詞は「**接続代名詞**」と呼ぶべきである、と述べている。このように接続詞という役割を強調すると、生徒は関係代名詞を接続詞の一部として認識してしまい、2文結合という役割しか認識することができない。

また、同様の例として、風早(2002、p.164)では、以下のことが示されている。(下線は引用者による)

① I know the man.

② He is playing the piano.

①+②=

③ I know the man who is playing the piano.

風早(2002)では、中学校で習った関係代名詞の復習として上記の例を用い、関係代名詞を2文結合であると述べている。風早(2002)では、①の文に **the man** という名詞があり、また、②の文にもそれとまったく同じ内容の代名詞があるので、②の代名詞を**関係代名詞**(=ここでは who)に代える。そし

て関係代名詞も**代名詞の一種**なので、結局、この作業は、代名詞を代名詞に代える作業をしたということになる。ただし、**2つの文を結合する特殊能力**を持った**関係代名詞**に変わった。という説明とともに関係代名詞を2文結合であると強調している。このように強調されれば、関係代名詞は2つの文をつなげるものだという認識が生まれるだろう。

上記のように、関係代名詞は2文結合、または2文連結として生徒に解説されていることが多いことがわかった。次節では、関係代名詞の役割は2文結合ではなく、後置修飾の一種であるという研究を示す。

2.2 関係代名詞の役割

前述の佐藤(2005)や、風早(2002)では、関係代名詞は2文結合であると解説されているが、今から50年以上前に関係代名詞が後置修飾の一種であると教えるべきだと指摘されている。丹下・加藤・高橋・倉田(1962)では、関係詞のもっとも根本的な原理は先行詞を後ろから修飾することであり、関係詞自体が節の主語や目的語等になっているとしている。しかし、現在に至っても、前述の佐藤(2005)や、風早(2002)をみてわかるように、関係代名詞の役割を誤解させるような教授法は続いている。学習参考書の多くには、こういった2文結合であるとする解説が見られる。

しかし、学習参考書以外の専門書をみると、関係代名詞を後置修飾の一種であるとする指摘がみられる。例えば Yule (1998)や Haegeman(1999)では、関係詞節は主節の情報を追加(modify)するために置かれると述べており、2文を結合するのではなく、情報を変化させる、つまり情報を追加させるものとしていることが分かる。

では、そのほかの例はどうだろうか。萩野(2008, p.99)では、関係代名詞の役割について、質問に答える形で説明している。萩野(2008)では、関係詞のそもそもの働きを生徒にわかりやすく説明するにはどうしたらよいか、という質問に対し、英語の名詞修飾を例に挙げて答えている。英語の名詞修飾は前置修飾と後置修飾にわかれており、関係詞は名詞の後ろから追加情報として名詞を修飾する後置修飾の一種として機能しているとしている。

さらに、関係詞を、先行詞について新たに情報を付け加えていくことを示す標識のようなものであるとしている。これからわかるように、関係詞の説明として、後置修飾であることを強調しており、後ろから情報を付け加えるものという認識である。

また、萩野(2000)は、関係詞節は後置修飾の形容詞節であるとし、名詞の前に形容詞節をつなげる日本語とは異なると述べている。また、英語は頭から順に理解するという「英語の発想」を持っているため、これに慣れることが重要であるとも述べている。

また、金谷(2007、p.4)にあるように、関係詞を2文結合を例として高校や中学の授業でそのまま生徒に教えると、生徒が関係代名詞は2文を結合するためのものである、と理解してしまう。そうすると、これによって関係代名詞本来の働きを誤解し、関係代名詞の使い方を正しく習得することができないとしている。つまり、関係代名詞を2文結合という形で説明されている生徒は、関係代名詞を後置修飾のためのものではなく、接続詞のようなものと誤解してしまうと警告している。金谷(2007)によると、特に関係代名詞の導入を中学で「2文結合」という形で解説されている生徒にとっては、関係代名詞が節による後置修飾のためのものであるという理解ができていないことが多々ある。2文結合の典型例である、

- 1) Nancy gave John a book.
- 2) Her uncle wrote a book.
- 3) Nancy gave John a book that her uncle wrote.

1)と2)をいっしょにすると、3)のようになるのだ、という2文結合による関係代名詞の導入をすると、生徒は、関係代名詞というのは2つの文をつなぐときに用いられる何やら不思議なものと誤解してしまう。節による後置修飾の例であることを説明してあげる必要がある、と述べている。

また、同様に関係代名詞が後置修飾であるという研究の例として、中岡(2006、p.136)では以下のように述べている。(下線は引用者による)

関係代名詞の働きの本質は名詞修飾のマーキングである。
 2文連結の扱いが繰り返し強化されても、そのことは関係代名詞の後に続く部分が修飾の働きを持つということの認識には直接結び付かない。2文連結の練習問題ができるからといって、関係代名詞を含む長文の読解力や表現力を保証できるというわけではない。

とあり、関係代名詞を後置修飾の一種であると強調している。

上記にあるように、関係代名詞は名詞を修飾するためのものであり、the man standing at the corner などの分詞句や the house on the hill のような前置詞句のように後ろから名詞(先行詞)を修飾する後置修飾の一種である。

以上の点から、関係代名詞は2文を結合するためのものではなく、後置修飾のためのものであると考えることができる。まずは導入の時点で、後置修飾を意識して教える必要があると考えられる。

2.3 2文結合の問題点

2文結合の問題点として、生徒が関係代名詞を後置修飾の一種であると理解できないということをこれまで述べてきた。しかし、その他にも2文結合として関係代名詞を教える際に起こりうる危険性として、「文の正当性の問題」が起こりうる。2文結合は2つの文を1つにまとめることで教えられるが、書き換えた文(結合された文)と元の2文が自然な英語であるか、という点が問題である。たとえば高橋(2011, p.165)によると、

次の2つの文を1つにせよ。

(1) Carlos is a boy. (2) He speaks Spanish and English.

⇒Carlos is a boy who speaks Spanish and English.

という問題を使って関係代名詞を説明する場合、(1)の文は明らかに不自然である。Carlosが少女であるならまだしも、わざわざこの名前でboyを

主張する必要はない。不自然な文をわざわざ使用しなくてはいけないような方法で教えるのは好ましいと言えるだろうか。

また、書き換える前の2文が正しくても、書き換えた後の文が正しくない可能性もある。以下の a) と b) は正しい文であるが、c) は正しい文とは言い難い。

a) I am a politician.

b) I have two sons.

c) I am a politician who has two sons.

杉山(1998)によると、先行詞が1、または2人称の代名詞であることは少なく、したがって、関係代名詞が1、または2人称であることもまれであるとしている。直接的な先行詞は a politician であるが、この語はIを指しているので不自然である。

また、Thomson & Martinet(1986)によると、限定用法の関係詞節は先行する名詞を限定するためのもので、これがないとその名詞がどの人/物を指すのかわからなくなるとある。しかしここでは、I と言っている時点ですでに誰かわからないということはないので、この人物はすでに特定されている。Thomson & Martinet(1986)では、関係代名詞は「関係詞節を取るとどれを指しているかわからなくなる」とあるので、この文は不自然であると考えることができる。

ここまでで関係代名詞の導入は後置修飾の一種であるということと、2文結合にはいくつか問題点があることがわかった。ここまでは関係代名詞の導入時について触れたが、次節では、生徒が関係代名詞を習得する際に、文の構造の違いによって習得の困難度が変わるという研究を示す。

2.4 生徒が苦手な関係代名詞のパターン

上記で関係代名詞がどのように教えられてきたか、そしてその役割について述べてきた。そこで、役割がどのようなものかをわかったうえで、今度はどのように教えれば習得できるのか、という点について考える。そこで、習得上の困難点について調べた。Keenan & Comrie(1977)によると、関

係詞が関係詞節の中でどの位置を占めるかによって名詞句の接近度階層として6つの型に分けている。6つの型はSU(主語)、DO(直接目的語)、IO(間接目的語)、OP(前置詞の目的語)、GEN(属格)、OCOMP(比較級の目的語)であるとしている。Keenan & Comrie(1977)によると、上記の6つの型はSU→DO→IO→OP→GEN→OCOMPの順になり、左側に行くほど上位となっていて、関係詞節内においてOPが存在する場合、それより上位にあるSUは必ず存在するとしている。このことから、目的格の関係代名詞の方が、主格の関係代名詞よりも理解が難しいことが予測される。

Pasty & Spada(2006)では、目的格の関係代名詞が理解できれば主格の関係代名詞が理解できるとする研究を紹介している。

表1 関係代名詞の習得順序表

Part of speech	Relative clause
Subject	The girl who was sick went home.
Direct object	The story that I read was long.
Indirect object	The man who[m] Susan gave the present to was happy.

この表1のうち、例えば Indirect Object が習得できればそれより上位の Direct object 及び Subject は習得できるということである。

しかし、Yule(1998)によると関係代名詞が主格か目的格かだけでなく、文の主語の位置を修飾するか目的語の位置を修飾するかによっても習得の難易度が変わる。本論文では、生徒の関係代名詞習得のためには、関係代名詞が主格であるか目的格であるかだけでなく、関係詞が修飾する位置についての言及もしている Yule(1998)のほうが、生徒が関係代名詞を習得するためには有用であると思われるので、こちらを採用する。Yule(1998)によると、関係代名詞を含む文には大きく分けて4パターンの文が存在する。その際、関係代名詞と先行詞の関係によってそのパターンが決定する。以下に Yule(1998)による各パターンを示す。(下線は引用者による)

例文：

OS: The man has a cat that likes the large dog.

I met a man who has a small cat.

OO: The woman has a large dog that the cat likes.

I also met the woman that he wants to marry.

SS: The man who lives next door has a cat.

The man who has a small cat likes the woman.

SO: The woman that the man wants to marry has a large dog.

The woman that the man likes has a large dog.

上記のように、先行詞が目的語(O)、関係代名詞の役割が主語(S)のものを OS タイプ、先行詞が目的語で関係代名詞が目的語の場合に OO タイプ、先行詞が主語で関係代名詞が主語のものを SS タイプ、先行詞が主語で関係代名詞が目的語のものを SO タイプとする。Yule(1998)では、英語の構造の基本である SV において、The woman that the man wants to marry has a large dog.なら主語である the woman と本動詞である has が離れているために理解が難しいのであるとしている。また、Yule(1998)では次の例文を用いて、学習者の習得の困難さについて述べている。

Relative clause in final position

O-S *I met **a man who** has a small cat.*

object subject

O-O *I also met **the woman that** he wants to marry.*

object object

Relative clause in medial position

S-S ***The man who** has the small cat likes the woman.*

subject subject

S-O ***The woman that** the man likes has a large dog.*

subject object

つまり学習者にとって一般的に主語の位置(NP)に埋め込むタイプ(SS,SOタイプ)よりも目的語の位置(VP)に埋め込むタイプ(OS,OOタイプ)の方がより習得しやすいため、後者をまずは習得させる方が望ましいとしている。

また、大塚・油井(2004)でも、次のような例文をあげ、関係節の認識の困難さについて言及している。

- a. I know the boy who broke the vase there.
- b. I know the boy whom you met yesterday.
- c. The boy who broke the vase there is Tom.
- d. The boy whom you met yesterday is Tom.

大塚・油井(2004)では、上記の例文について、日本人学習者にとって OS,OOタイプの文よりも、SS,SOタイプの文の方が理解するのが困難であると述べている。また、学習者が左から文を読む際に、OS,OOタイプの文は最後に関係詞節が来るので思考が途切れずに修飾された名詞句を理解することができるとし、SS,SOタイプの文は文の途中で埋め込まれているので主語の終わりの位置が分かりにくいために理解が困難であるとも述べている。

高島・牧野・道丸(1994、pp.51-53)では、学習者が関係代名詞節を理解する際の困難度を明確にするために、ある私立大学の非英語専攻の学生112名と高校1年生34名に英文和訳をさせ、ペアとなっている文のうちどちらが難しいと感じたかを示してもらい、理由も書かせるという調査をし、以下の結果が得られた。(難易度欄の該当箇所、及び問題文の下線は引用者による)

表 2 英文和訳の際の困難さの比較

難易度	大学生(112名)	高校生(34名)
OO>OS(1)&(2)	83(74.1%)	25(73.5%)
SS>OS(3)&(4)	97(86.6%)	24(70.6%)
SO>SS(5)&(6)	85(75.9%)	19(55.9%)
SO>OS	78(69.6%)	25(73.5%)
SO>OO	78(69.6%)	20(58.8%)
SS>OO	70(62.5%)	21(61.8%)

調査方法：

以下のペアの文を読んでそれぞれの英文の下に訳をしない。また、その場合に、どちらのほうが難しかったか、難しいほうの番号に○を付けなさい。さらに、右の空いているところには、難しいと考えた理由をできるだけ詳しく書きなさい。(問題文は一部のみ掲載、問題文の左にあるそれぞれの文タイプは引用者による)

OS(1) She has a dog which likes swimming. } (1)と(2)

OO(2) She has a dog which everybody likes. } がペア

困難度は (1) (2)

SS(3) The dog which runs fast has short hair. } (3)と(4)

OS(4) I have a dog which has white hair. } がペア

困難度は (3) (4)

SS(5) The dog which has black hair runs fast. } (5)と(6)

SO(6) The cat which I have likes sleeping. } がペア

困難度は (5) (6)

上記の結果を習得が困難な順から並べると SO>SS>OO>OS となる。このことから関係詞が目的語となる方が習得するのが困難なため、主語の位置に関係詞節があり、関係詞が目的語である SO タイプの文が最も難

しいという結果になっている。これが上記の Yule(1998)と同様である。さらに高島・牧野・道丸(1994)では、SO タイプの文の場合には学習者が文解釈の際に左側から右側へ目を移していく場合に、学習者の中で SVO(SVC)の順番で文を解釈しようとする戦略、つまり、動詞の次には目的語(もしくは補語)が来るだろうという無意識が働く。これによって、関係代名詞が主語の位置にあると思考が止まってしまうことと、主語がどこまで続いているのか分かりにくいことが SO タイプの文の困難点であると述べている。

この難しさを踏まえて、関係代名詞を習得するために必要なこととして、中岡(2006)では関係詞節を含む名詞句を作る練習を提案している。これについては3章以降で述べることとする。

また、高島・牧野・道丸(1994)では示されていないが、The plan they finally decided on was to move the temples 64 meters above.のように関係詞節内の動詞の後ろに前置詞などがある場合も、主語の終わりが分かりにくくなり、理解の妨げになると思われる。これについては3章以降で述べることとする。

このように、先行研究で関係代名詞の役割が名詞を後ろから修飾する後置修飾であることが分かった。3章以降では、実際に Yule(1998)が指摘したような生徒が苦手とする関係代名詞の文パターン以外でも、関係詞節内の構造の複雑さによって生徒の習得に影響があるのではないかと考え、実際に高校生に問題を解かせ、それに加えてテキスト分析を基に、生徒に不足している要素を調べ、関係代名詞を習得するためにはどのような方法が良いかを研究していく。

3 研究課題

3.1 生徒が苦手とする関係代名詞の文パターン

前章で述べた Yule(1998)が示した学習者が苦手とする文パターン(SO,SS)などに加えて、生徒は SO や OO の関係節の最後に前置詞が残る前置詞残留を苦手とするのではないかと考える。つまり、関係詞節の終わりに前置

詞が残る文は、生徒の混乱を招き、Yule(1998)で最も難しいと言われているSOパターンの文よりも習得が難しいのではないかと考えた。特にSOパターンでは、本動詞の直前に前置詞が残るので生徒にとって理解、習得が困難であると考えられる。高島(1998)でも言われている通り、生徒が左から順に読んでいく際に、SVO(SVC)のストラテジーが働くためにSO,SSパターンが苦手なのはわかっているが、本研究では、The plan they finally decided on was to move the temple.のような前置詞残留を含む文のほうが、前置詞残留を含まない文よりも習得できていないのではないかと考えた。そこで高校生を対象とした調査を行い、高校生が習得しにくい関係代名詞を含む文構造を調べる。

3.2 検定教科書からのインプット

高等学校用の検定教科書について、関係代名詞における生徒の苦手な文パターンのインプットの量が少ないのではないかと考える。OS,OOパターンの文はSS,SOパターンの文と比べて教科書に多く出現すると思われるが、生徒が苦手とするパターンを身につけるためには多くのインプットを与えなければならない。しかし、教科書内にはSS,SOパターンの文はあまり書かれておらず、さらに、上記で述べた生徒が苦手とする前置詞残留を含む文は、SO,SSパターンの文よりも教科書に出てくる頻度は少ないのではないかと考え、教科書内の関係代名詞を含む文を抜き出し、調査する。

3.3 生徒が関係代名詞を習得するための方法

生徒が苦手とする関係代名詞のパターンを調べ、教科書内に出現する関係代名詞のパターンを調べたうえで、どのような指導法および練習方法を用いれば、関係代名詞が生徒により定着するかを研究する。関係代名詞習得の流れとしては、

a) Tom is a boy.

b) He speaks English.

a)の文と b)の文を1つにすると

c) Tom is a boy who speaks English.

c)の文になる。というような、いわゆる2文結合の教授法ではなく、

- ① 後置修飾という役割の認識を徹底
- ② 名詞句を作る練習
- ③ 文の中に埋め込む練習

という関係代名詞の役割を後置修飾の一種であるという前提のもとで、名詞句から文全体へという段階を踏んだ教授法を採用し、授業に生かせる提案をする。したがって、本論文では、従来とは異なる指導法を提案する。

4 検証方法

4.1 生徒が苦手とする関係代名詞の文パターンの調査

Yule(1998)等で述べられている学習者が苦手とする文パターンと、前章で述べた前置詞残留の例文を並べ替え問題の形式にし、ある県立高校の3年生(37名)に回答させる。問題演習を行う時期は11月とする。その際に用いた例文を一部示す。

OS: I'd like to make stories that always end happily.

OO: I gave her all the money that I had.

OO(前置詞残留): What is the name of that hotel you told me about?

SS: Children who are moved by comics do not stop reading them even after they become high school students or adults.

SO: The museum we wanted to visit was closed when we got there.

SO(前置詞残留): The plan they finally decided on was to move the temples to a cliff 64 meters above.

上記の下線部を並べ替え、日本語を与えて答えさせる。問題例を以下に示す。

次の文を示された日本語と同じ意味になるように、[]の語句を並べ

替えなさい。問題の都合上、文頭にくる単語も小文字で始めています。

1 彼らが話していたことに、私は興味がなかった。

I wasn't interested in [about / talking/ the things / they /were].

I wasn't interested in _____.

2 彼らが最終的に決定した計画は、寺を 64 メートル上の崖に移動することだった。

[decided on / the plan / they finally / was / which] to move the temples to a cliff 64 meters above.

_____ to move the temples to a cliff 64 meters above.

3 私たちが訪れたかった博物館は、着いた時には閉まっていた。

The museum (closed / visit / wanted to / was/ we) when we got there.

The museum _____ when we got there.

4 彼が恋に落ちたその女性は、数週間後に彼を置いて去ってしまった。

(fell / he / in / love / the woman/ with) left him after a few weeks.

_____ left him after a few weeks.

5 私は、持っているお金をすべて彼女にあげた。

I gave her (all / had / I / that / the money).

I gave her _____.

6 昨日なくした鍵は見つかった？

Have you (found / keys / lost / the / yesterday / you)?

Have you _____?

7 漫画で感動した子供たちは、高校生や大人になった後でも、読むのをやめない。

(are moved / by comics / children / do not stop / who) reading them even after they become high school students or adults.

_____ reading them even after they become high school students or adults.

8 君が僕に話してくれたホテルの名前はなんだっけ？

What is (about / told me / the name / that hotel / you / of)?

What is _____?

9 僕が会いたかった女性は不在だった。

(I / see / wanted to / the woman / was) away.

_____ away.

10 君は、自分にとって大切な夢を見つけるだろう。

You'll find (a dream / important / is / that / to / you).

You'll find _____.

11 新潟を流れる最も長い川は、信濃川です。

(Niigata / river / runs / the longest / which / through) is the Shinano River.

_____ is the Shinano River.

12 私はハッピーエンドでいつも終わる物語を描きたい。

I'd like to make (always / end / happily / stories / that).

I'd like to make _____.

解答方法は、上記の下線部に生徒が単語を正しいと思われる順番に並べ替えて書き込む形式になっている。時間は、調査をお願いする先生の授業終了前の10分程度とし、プライバシー保護のため、無記名で回収した。また、今回集めたデータは語順に重点を置くため、綴り字の誤りは誤答と見なさないこととする。

4.2 検定教科書に書かれている関係代名詞を含む文

3.2 で述べた、生徒が苦手とする関係代名詞の文パターンのインプット量を調べるために、現在出版されている高等学校向け検定英語教科用図書(以下教科書)の中から進学校向けとされているものを選ぶ。使用する教科書は *CROWN*(三省堂)、*PROMINENCE*(東京書籍)、*UNICORN*(文英堂)、*PRO-VISION*(桐原書店)、*Voyager*(第一学習社)を選出し、関係代名詞を含む文を抜き出す。進学校向けとされていることの確認はすべての会社に確認を取った。また、上記の5社を選出した基準は、「教科書採択数・採択率一覧 <http://www.15.ocn.ne.jp/~textbook/page016.html>」から、進学校向けとされ

ている教科書を上から順に選んだ。難易度の高いものを選んだ理由は、難易度が高い教科書のほうが関係代名詞の出現頻度が高くなるためである。

4.3 生徒が関係代名詞を習得するための方法

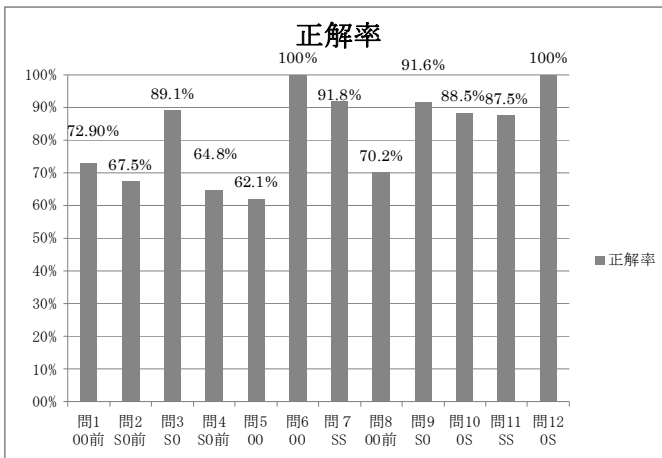
上記の調査を終えた後に、その結果を踏まえてどのような指導法を用いれば生徒が関係代名詞を習得できるかを考察する。先行研究で述べた関係代名詞の後置修飾の役割の徹底、高校生に演習問題を解かせることで、生徒が苦手としている関係代名詞の文パターンの把握をする。さらに教科書に出現する関係代名詞を含む文の量を調べることによって教科書がカバーできる範囲を調べ、それによって、何を教師が補足する必要があるかを調べる。その上でどのような導入、練習方法を用いるべきかを考察する。

5 検証結果

5.1 高校生の苦手な関係代名詞の文パターン

4.1 で述べた検証方法を用いて、県立の高等学校の3年生37名に問題を解かせ、得られた結果が表3である。

表3 各問における正解率



上記の表 3 の中で特に正解率が低いものを挙げると、

問5 OO I gave her all the money that I had. 62.10%

問4 SO前 The woman he fell in love with left him after a few weeks.
64.80%

問2 SO前 The plan which they finally decided on was to move the temples to
a cliff 64 meters above. 67.50%

問8 OO前 What is the name of that hotel you told me about? 70.20%

問1 OO前 I wasn't interested in the things they were talking about. 72.90%

のようになる。その他の問に関しては80%を大きく超えている。

結果として、上位5問のうち問5以外はすべて前置詞残留が起こっている。以下に各問題中最も多かった誤答例を示す。(下線部が並べ替え問題の部分)

問1 I wasn't interested in the things about they were talking.

問2 They finally decided on the plan which was to move the temples to a cliff
64 meters above.

問3 The museum was closed we wanted to visit when we got there.

問4 He fell in love with the woman left him after a few weeks.

問5 I gave her the money that I had all.

問6 誤答例なし

問7 Children are moved by comics who do not stop reading them even after
they become high school students or adults.

問8 What is the name of you told me about that hotel?

問9 I wanted to see the woman was away.

問10 You'll find to you that is important a dream.

問11 River runs through Niigata which the longest is the Shinano River.

問12 誤答例なし

生徒の苦手な関係代名詞のパターンの傾向を見るために、特に間違いの多かったものの誤答を以下に示す。()は該当の誤答数/全体の誤答数となっている。

- 問5 I gave her the money that I had all. (8/14)
I gave her the money that all I had. (4/14)
I gave her that I had all the money. (2/14)
- 問4 He fell in love with the woman left him after a few weeks. (7/13)
The woman with he fell in love left him after a few weeks. (5/13)
The woman he fell in love left him after a few weeks. (1/13)
- 問2 They finally decided on the plan which was to move the temple … above. (5/11)
The plan was they finally decided on which to move the temple … above. (1/11)
They finally was decided on which the plan to move the temple … above. (1/11)
The plan was decided on they finally which to move the temple … above. (1/11)
The plan which was decided on they finally to move the temple … above. (1/11)
The plan which was they finally decided on to move the temple … above. (1/11)
They finally decided on which the plan was to move the temple … above. (1/11)
- 問8 What is the name of you told me about that hotel? (2/11)
What is about the name of that hotel you told me? (2/11)
What is that hotel the name of you told me about? (1/11)
What is about you told me that hotel the name of? (1/11)
What is the name that hotel about you told me? (1/11)
What is the name of that hotel told me? (1/11)
What is the name you told me about of that hotel? (1/11)
What is the name that hotel of you told me about? (1/11)
What is the name of that hotel about you told me? (1/11)
- 問1 I wasn't interested in the things about they were talking. (4/10)
I wasn't interested in talking about the things they were. (2/10)
I wasn't interested in they were talking about the things. (2/10)
I wasn't interested in the things talking about they were. (1/10)
I wasn't interested in about they were talking the things. (1/10)

問4や問2のSOに前置詞残留が含まれるパターンの問題の誤答は、両者ともにHe fell in love with the woman left him after a few weeks.やThey finally

decided on the plan which was to move the temple ... above.のように、「先行詞＋関係詞節の後置修飾」の使い方がわかっていないのではないかという傾向がみられる。

また、OO に前置詞残留が含まれる問 8、問 1 に関しては、前置詞 about をどこに入れたらよいかわからず、What is about the name of that hotel you told me?や I wasn't interested in the things about they were talking.のように、about の処理に困り、無造作に入れてしまったと考えられる。この結果からみて、前置詞残留を使いこなせていないということが考えられる。高校 3 年生のこの時期に使いこなせていないのであれば、卒業するまでに定着するとは考えにくい。そこで、なぜ定着していないかを考えた際に、定着していない理由の一つとしてインプット量の不足が考えられる。そこで Yule(1998)の 4 パターンに加えて、SO,OO に前置詞残留を伴う文のインプット量がどうなっているのかを以下の調査結果に示す。

5.2 検定教科書内の関係代名詞

上記の結果をみると、関係代名詞を含む文のうち、5.1 での前置詞残留が含まれる文の正解率が低いことがわかった。そこで Yule(1998)の OS, OO, SS, SO の 4 パターンに加えて、OO と SO のタイプに前置詞残留を伴う文が教科書内でどの程度現れているかを調べた結果が以下の表 4 である。表中の OO と SO についている()内の数字は前置詞残留を伴う回数を示す。以下、R は Reading を示すこととする。

表 4 検定教科書における関係代名詞のインプット量

高等学校検定教科書	OS	OO(前置詞残留)	SS	SO(前置詞残留)	計
<i>CROWN I</i>	14	4	3	2(1)	23
<i>CROWN II</i>	28	19(2)	3	2	52
<i>CROWN R</i>	70	55(2)	10	9	144
<i>PROVISION I</i>	20	10	3	1	34
<i>PROVISION II</i>	35	11	6	1	53
<i>PROVISION R</i>	30	40(3)	5	5	80
<i>UNICORN I</i>	8	8	3	1	20

<i>UNICORN II</i>	26	25(4)	4	3	58
<i>UNICORN R</i>	38	16(1)	2	8(1)	64
<i>PROMINENCE I</i>	13	14(1)	4	0	31
<i>PROMINENCE II</i>	26	15	7	1	49
<i>PROMINENCE R</i>	36	24(1)	5	3	68
<i>Voyager I</i>	26	5(1)	1	2	34
<i>Voyager II</i>	32	19(1)	4	2	57
<i>Voyager R</i>	127	49(3)	5	2	183

表4によると、関係代名詞を含む文の出現回数はI→II→Rの順に増える傾向にある。この結果に見られる傾向としては、OS,OOパターンは、どの教科書においても比較的出現回数も多く、生徒にとっては見慣れた表現になっていると考えられる。5.1の高校生の調査においても、OS,OOやパターンの正解率は高かった。つまり、全員が習得できているとは言えないが、OS,OOパターンについては、現行の教科書だけでもインプット量は十分といえるだろう。

それとは逆に、5.1での調査結果において正解率が低かった前置詞残留を伴う文の教科書から抜き出した例を以下に示す。文の最初にある()はそれぞれの文パターンを示す(前は前置詞残留)。

CROWN I : (SO 前) The plan which they finally decided on was to move the temples to a cliff 64 meters above.

CROWN II : (OO 前) She is the scientist (whom) I talked about yesterday.
(OO 前) This is the movie (which [that]) I'm planning to go to.

CROWN R : (SO 前) I soon found the place I was in was not for my settlement, so I resolved to find more healthy and more convenient spot of ground.

(OO 前) What's the use of all those big theories I was taking about in the classroom?

PROVISION R : (OO 前) He would delight in talking everyday objects that he found lying around and, with the minimum of this was Tete de taureau (Bull'sHead) which he made by fixing the handlebars of bicycle to the top of a bicycle seat.

(OO 前) As these initiatives have progressed, it has been possible to notice in the reaction of some people the very attitude I have been referring to, that Maori is simply not capable of being used as an official language or as the language of education beyond the very basic level.

(OO 前) This is the house I asked Kriss for.

UNICORN II : (OO 前) “Sound is vibrating air that the ear picks up and changes into electrical signals.”

(OO 前) I put together a three-page letter to the class we had spoken to.

(OO 前) It was the chance I had been waiting for!

(OO 前) He nuzzled the berry I'd spat out and ate it.

UNICORN R : (SO 前) But the plane I stepped out from was not the Gull.

PROMINENCE I : (OO 前) As *Kùchenmeister*, I want to create dishes I can be proud of and also be a bridge between Japanese and Austrian food cultures.

PROMINENCE R : (OO 前) Yes, that's all I can think about!

Voyager I : (SO 前) A book you are looking for in a library will say, “Here I am.”

Voyager II : (OO 前) Each of you in turn must tell the funniest joke he or she can think of, and the one who gets the most laughter will get my

fortune.

Voyager R: (OO 前) She appears to be an attractive young lady that everybody is really fond of.

(OO 前) This is not something we should be ashamed of, since it is natural result of grouping up in any society.

(OO 前) At seven-thirty we too closed the door behind us: Moortje, my cat, was the only living creature I said goodbye to.

上記の例をみると前置詞残留を伴う SO,OO は、教科書全体を通して出現回数が少なく、SO の前置詞残留を伴う文が一度も出てこない教科書もある。また、英語 I や II で一度も前置詞残留に触れていない教科書もある。全体を通してみれば、インプットの量としては極めて少ない傾向にあると見てよいだろう。教科書の本文の分量によっても変わるが、教科書本文に対する割合はとても少ない。さらに、表 4 にもあるように、前置詞残留を伴う OO,SO パターンの出現回数は前置詞残留を伴わない SO パターンよりも少ない傾向がある。そのため、生徒にとってほとんど目にしたことの無い構造の文になり、生徒の記憶に残らないので、習得するのは困難になると考えられる。

5.1 及び 5.2 の調査結果からわかることは、生徒は Yule(1998)で述べられているような SO,SS パターンよりも前置詞残留を含む SO,OO パターンのほうが習得しづらいということである。また、教科書内に出現する SO,SS パターンや、前置詞残留を含む文パターンはインプット量が少ない傾向にあるということがわかった。このことから、どのようにすれば生徒の習得を手助けできるのかを 6 章以降で述べる。

6 考察

6.1 高校生の苦手とする関係代名詞の文パターンについて

Yule(1998)や、高島・牧野・道丸(1994)では、関係代名詞を含む文において、関係節が文の主語の位置、または目的語の位置にあるかという点と、

関係代名詞が主語の働きをするか、目的語の働きをするかの4パターンのみで習得の難易度を述べていた。(図1)

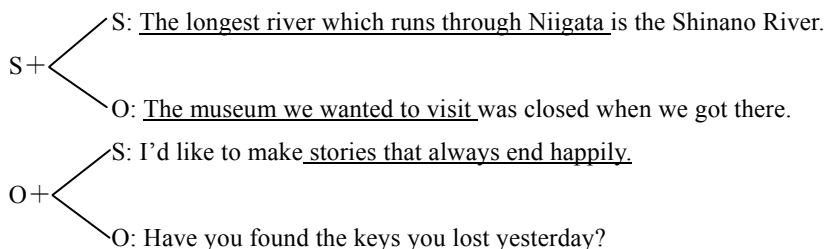


図1 Yule(1998)における関係代名詞の文パターン

また、5.1の調査結果では、問6 Have you found the keys you lost yesterday? や問12 I'd like to make the stories that always end happily.のようにYule(1998)などで比較的習得が容易とされているものに関しては、正解率を見て解るとおり、SO,SSよりも高い数値が得られている。これらに関しては、Yule(1998)や高島・牧野・道丸(1994)の結果と同様になったと言えるだろう。

しかし、5章の結果から、Yule(1998)で最も習得が困難とされている前置詞残留を伴わないSOパターンの正解率よりも、前置詞残留を伴うOO,SOの問題の正解率は低く、習得できていないことがわかった。特に5.2で示したSOの前置詞残留に関しては、CROWN I と UNICORN R 以外には教科書に出てこないのに、生徒にとってのインプットは教師が意図的に提示するか、もしくは生徒が何らかの形で自習として読む以外には得られず、インプットの量が少ないことから、生徒の記憶には残りづらいのである。この前置詞残留を含むパターンの文も、Yule(1998)で習得が最も困難とされているSOパターンのタイプ以上に教師が意識的に提示、練習をさせることが必要になると思われる。

SS,SOパターンに関しては、表4にもあるように、OS,OOパターン程教科書内での出現回数は多くないが、5.1の調査結果にあるように、生徒の正解率は高く、およそ90%である。現段階の調査ではサンプル数が少ないことと、高校3年生ということもあり、一概には言えないが、今回の調査に限っては、SS,SOパターンのインプット量は十分であると考えられる。

ただし、これらのタイプの文も教科書内で扱われることが少ないので、教科書とは別に例示、練習が必要であろう。

しかし、5.1の結果をみると、比較的習得が容易とされているはずのOOタイプであるにもかかわらず、問5の正答率は最も低かった。そこで問5に関して誤答例を見てみると、

問5 a) I gave her **the money that I had all.** (8/14)

b) I gave her **the money that all I had.** (4/14)

c) I gave her **that I had all the money.** (2/14)

となっており、上記のa)とb)に関しては、関係代名詞 *that* の位置や、*gave* のSVOOの関係は理解しているが、*all the money* の語順が分からないことから発生した間違いであると考えられる。つまり、関係代名詞がどこを修飾しているかというより、*all the money* の語順がわからない生徒が多かったように思われるので、関係代名詞の役割を理解していなかったとはいえないと考えられる。

Yule(1998)の4パターン(図1)に加えて、この論文においてはSO及びOOパターンにおいて、関係節が埋め込まれる場所(文中におけるNP、もしくはVPの位置)や関係代名詞の格(関係節内での役割)だけではなく、関係節内の構造の難しさによっても習得の難易度が変わるのでないかとして、SO及びOOパターンのうち、前置詞残留を伴う文を追加して(図2)、5.1において高校生37名に並べ替え形式の問題演習をさせたものを検証した。

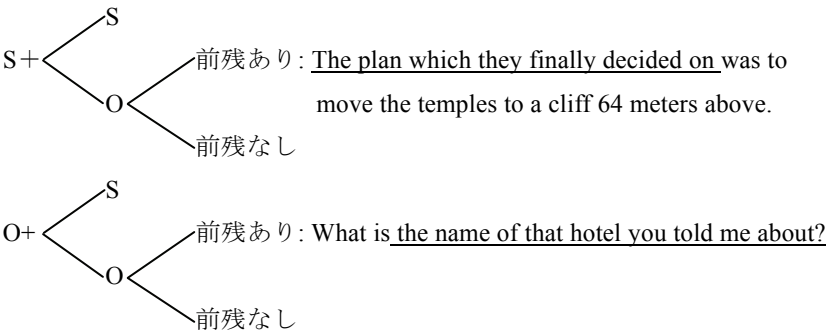


図2 前置詞残留を伴う関係代名詞

今回の検証によると、少ないサンプル数ではあるが、関係節内の構造がどのようなものかによって結果が変わるようであり、What is the name of that hotel you told me about?に見られるような、従来習得が比較的容易であるとされていた OO パターンの中でも前置詞残留を伴う文は前置詞残留を伴わない SO タイプの文よりも正解率が低かった。つまり **OO(前置詞残留) > SO** の困難度になる可能性がある、ということが分かった。したがって、習得が比較的容易であると言われている OO タイプの文であっても、関係節内の構造の変化によって習得が困難になる可能性がある。これは、5.2 の調査結果にもあったように、教科書内における関係代名詞を含む文に、前置詞残留を伴う文の量が圧倒的に少ないことにも起因すると思われる。こういった結果からも、教科書内の文だけでなく、教師が意識的にこのような前置詞残留を伴う文を練習させなければならないことが分かる。

Murphy(2004、p.187)には前置詞残留を練習させる問題がある。このような文法の参考書に練習問題が特別に設けられるということは、こういった前置詞残留の練習が必要であると見なされていると考えてよいだろう。以下に問題の引用を示す。

93.3 Complete each sentence using a relative clause with a preposition.

Choose from the box.

we went to a party last night	you can rely on Gary	we were invited to a wedding
I work with some people	I applied for a job	you told me about a hotel
you were looking for some books		I saw you with a man

- 1 Are these books *you were looking for*?
- 2 Unfortunately we couldn't go to the wedding _____.
- 3 I enjoy my job. I like the people _____.
- 4 What's the name of that hotel _____?
- 5 The party _____ wasn't very enjoyable.
- 6 I didn't get the job _____.

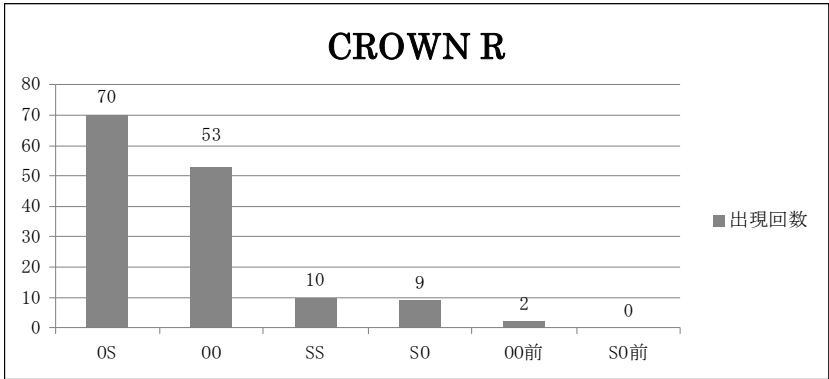
- 7 Gary is a good person to know. He's somebody _____.
- 8 Who was that man _____ in the restaurant?

上記の演習問題は、下線部に当てはまる関係詞節を適当な形に直して当てはめる問題であるが、必ず前置詞残留を伴う文になるよう構成されている。このように、前置詞残留を意識的に練習させることによって習得を促していると思われる。

これまでの結果を、ここでもう一度整理しておきたい。習得が比較的困難とされていた SO タイプの中でも特に前置詞残留が伴うタイプと、Yule(1998) で習得が比較的容易とされていた OO タイプのうち、前置詞残留が起こるタイプは、生徒にとって習得が難しい可能性がある、ということが判明した。不等号で難しい順に表すと、SO,OO の前置詞残留 > SO,SS > OO,OS の順になる。

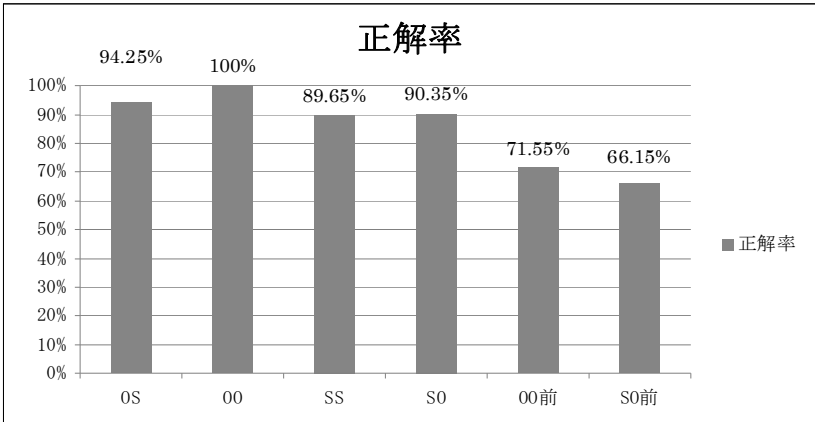
さらに、例として 5.2 で示した *CROWN R* における関係代名詞のインプット量と 5.1 で示した正解率とを照らし合わせてみると、上記の不等号の順番とほぼ比例の関係にあることが分かる(表 5、6)。つまり、教科書に出現する関係代名詞のパターンと、5.1 の演習問題の正解率はほぼ比例しており、習得の困難さが高いものほど教科書には出現しない傾向があった。これらから言えることは、インプットの量が少なければ、生徒の習得が困難になるということであり、こういった問題に対してどう対処するか、ということが重要になってくる。単純にこの結果から考えれば、生徒に対して、教科書以外のインプットを与えることが必要になる。これに関しては、7章にてさらに詳しく記述する。

表 5 CROWN R における関係代名詞のインプット量



※縦軸の数字は出現回数を示す。

表 6 5.1 における各問の正解率



※表 6 の各％は 5.1 の結果のうち同種の問題の％を合わせて計算しているが、OO に関しては p.28 で述べたように問 5 の結果は他の要素に影響された可能性が高い。そのためこの表では問 6 のみの結果としている。

しかし、前置詞残留を含まないパターンの文について問題がないわけではなく、5.1 の結果をみると、どのパターンにおいても、順番を何も考えずに答えているであろう生徒も含めて、名詞句を作る作業に慣れていない

ことがわかる。

そこで、7章では大塚・油井(2004)で挙げられた階層的指導法と、名詞句を作る練習法に加えて、前置詞残留を習得するための指導法を述べる。階層的指導法とは、最終的に関係代名詞を含む文を作るという目標に対し、まずは名詞句の単位から関係代名詞の練習をさせるという指導法である。

7 関係代名詞を習得するための指導法の具体例

7.1 後置修飾であることの徹底

まず、関係代名詞を教える際には前置詞句(*on the hill*) や分詞句(*-ing, -en*)の後置修飾などと同じ後置修飾であるということを生徒に理解させ、実際に使えるようにする。そのために、まずは分詞句や前置詞句などが習得できているかを確認し、文で先行詞を修飾するのが関係詞であることを理解させる。

たとえば、金谷(2007)では、後置修飾の例として、

前置詞句：

a book on the desk

a girl from Canada

to 不定詞：

something to eat

分詞：

people living in this country

a novel written by Soseki Natsume

を挙げている。このような例を用いて生徒に関係代名詞の役割を後置修飾の一種であると理解させる。

関係代名詞を後置修飾として生徒に理解させ習得させるためには、導入時点で後置修飾の徹底させる必要があると考える。そして「名詞句+形容詞句」という後置修飾の語順の徹底をした後で、初めて関係代名詞を含んだ文を作る練習をさせる必要があると考える。

6章で述べた階層的指導法とは、いきなり文から考えるのではなく、小

小さな単位から次第に大きくしていくことによって習得を図ろうというものである。階層的指導法を用いた導入の指導例として、以下に例を2つ示す。

中岡(2006)では、まず日本語で「文」と「大きな名詞句」の区別をつけることを勧めている。以下に例を引用する。

文のレベルのものには(文)、大きな名詞句レベルのものに(名)と書き、大きな名詞句全体に__を引き、中心となる名詞を□で囲みなさい。

解答例

例 (名) 私が読んだ□本

① (文) 老人は指輪を古い箱から取り出した

② (名) 今朝受け取った□小包

③ (文) 探偵は掲示板に暗号で依頼人にメッセージを書いた

という練習方法を挙げている。こうすることで文と名詞句が違うものを意識させるとしている。この作業で名詞修飾の土台を作る。

また、大塚・油井(2004)では、日本語と英語の違いを認識させるために、花瓶を壊した少年の例を用いて気づきを与えるとしている。


まず関係詞を必要とするコンテキストを設定し、学習者に主格関係詞節を含む名詞句を提示し、階層構造(hierarchical structure)すなわち関係詞節が名詞を修飾していることに気づかせる。例えば、花瓶を割った少年の絵を見せて、学習者たちに絵で示された状況を日本語で表現させる。それから(5a)と(5b)のような英語と日本語の関係詞節を含む名詞句を提示する。そして、関係詞節は英語では右方向から先行詞を修飾し、一方、日本語では左方向から先行詞を修飾するということを学習者に気

づかせる。

(5)

a. 英語

the boy [who broke the vase]



b. 日本語

[花瓶を壊した]少年



本論文では、上記の方法を応用して、まずは後置修飾の基本から、徐々に関係代名詞につなげていく。基本的な方法としては、

- 1 既習の比較的簡単な名詞の後置修飾を復習する
- 2 同様の後置修飾の一種として関係代名詞を提示する
- 3 練習して定着させる

として、明示的に説明をするのではなく、まず例を出し、同じような構造であることを気付かせることが重要であると考え。授業で用いる具体的方法としては、

①教卓に教科書を置く

⇒ (口頭)The book on the desk is mine. →生徒に復唱させる

②教卓の上の本を生徒に渡す

⇒ (口頭)The book [which] he has is mine. →生徒に復唱させる

③口頭で述べた例文を黒板に書く

④黒板の文字と一致させる

上記の①～④を行うことで、後置修飾の同じ仲間であることを気付かせる。これを繰り返す、または同様の例をいくつか出すことによって、構造が同じであることを理解させる。さらに、生徒に英語を聞かせる際に、音声で名詞句の区切りをはっきりと示し、文と名詞句の違いを強調し、生徒にも違いが分かるように発音させる。このように、後置修飾の例と同時に提示することによって、生徒は関係代名詞が後置修飾構造の1つであると認識できるようになるだろう。

7.2 名詞句から文全体へ

関係詞節が後置修飾であることを理解させたら、次は「先行詞＋関係詞節」というかたまりを作る練習をさせる。これができるようになったら、後はその名詞句を文の主語の位置か目的語の位置かに埋め込むだけである。

中岡(2006)、大塚・油井(2004)において、初めに名詞句を作る練習をし、次に文全体を作る練習へという一連の方向性がある。まず、名詞句の主要部となる先行詞を見つけ、その修飾部となる関係節を付け加える練習をさせる。その作業が自動的に出来るようになるまでこの練習をし、初めて文全体へと移行することができる。

具体的に教師が授業で用いる場合には、

- 1 様々な状況を示す絵や写真を用意する
⇒花瓶を壊した少年や、物を盗んでいる男の絵や写真など
 - 2 1の絵や写真に対応する名詞句を日本語⇒英語で作らせる
⇒まずは日本語で名詞句を作る練習をさせ、次第に英語に切り替えさせる
 - 3 自動化できるまで口頭で練習させる
⇒チャンクとして身体で感覚を覚えさせる
 - 4 文へ埋め込ませる
⇒名詞句を一つの名詞のように扱い、主語にしたり目的語にしたりすることで、SO,OO や、SS,OS の位置に組み込ませる
- 上記のように、まず名詞句を作り、一つの名詞のように扱えるようになることによって、従来の2文結合よりも関係節の埋め込む位置や関係代名詞の役割に関係なく、文が作れるようになると思う。また、後置修飾という役割が分かっているので、左から語順どおりに理解できるようになると考える。

7.3 疑問詞を用いて前置詞残留を習得する

5.1の結果からわかるように、生徒は前置詞残留を伴う関係代名詞の文が苦手である。言い換えれば、前置詞残留を伴うWH移動が苦手であると

いうことができる。したがって、疑問詞に前置詞残留が伴うものを練習させ、習得させることによって関係代名詞の前置詞残留を伴う文も習得させることができるのではないかと考える。

まず、生徒に簡単な疑問詞を用いる英作文をさせる。

例：

次の日本語を()内の語を用いて英語にせよ。

- 1 何が心配なの？(worry)
- 2 この本は誰のもの？(belong)
- 3 誰からお金借りてるの？(borrow)
- 4 誰と話したいの？(speak)
- 5 どこから来たの？(be)
- 6 誰があの家に住んでいるの？(live)

これらの正答は、それぞれ、

- 1 What are you worried about?
- 2 Who does this book belong to?
- 3 Who did you borrow the money from?
- 4 Who do you want to speak to?
- 5 Where are you from?
- 6 Who lives in that house?

となるが、下線部を書き忘れる生徒が出てくるとわれ、それに対するフィードバックとして、同じ問題を再度配り、各問題文の横に次のような文を与えておく。

- 1 何が心配なの？(worry) ***You are worried about your father.***
- 2 この本は誰のもの？(belong) ***This book belongs to the city library.***
- 3 誰からお金借りてるの？(borrow) ***I borrowed the money from my mother.***
- 4 誰と話したいの？(speak) ***I want to speak to your father.***
- 5 どこから来たの？(be) ***I'm from Japan.***

6 誰があの家に住んでいるの？(live) *My uncle lives in that house.*

問題文の横にあるヒントを参考にして生徒はもう一度英作文を行う。すると、生徒はヒントから、前置詞残留に気が付くのではないかと考えられる。ここで初めて答え合わせと解説を行うこととする。こうして生徒に気付きを促したうえで、これらの例文を復唱させ、練習させる。この作業を、文字を見ずに口頭で言えるようになるまで練習させ、日本語から英語に自然と言い換えられるようにする。

上記のことができるようになってから、6章で示した、Murphy(2004)のような問題を行わせることによって、前置詞残留を伴う関係代名詞も習得させることができると考える。疑問詞の演習で習得が完了していれば、関係代名詞の問題に直面しても、疑問詞の前置詞残留と同様に関係代名詞にも前置詞残留が伴うことに気付くことができるはずだ。

8 まとめ

本論文では、関係代名詞を生徒に習得させるための一方法として、関係代名詞の導入の際に生徒に後置修飾を徹底させるという立場をとった。

2.2や2.3では、関係代名詞は後置修飾の一種として指導した方が有効であるという先行研究を分析・整理した。

また、Yule(1998)などで関係代名詞を含む文には OS, OO, SS, SO の4パターンがあり、SO や SS パターンの文が OO や OS パターンの文より習得が比較的難しいとされていた。しかし、本論文では、関係詞節内の構造によっても生徒が習得するための困難度に違いが表れるのではないかと考え、高校3年生を対象とした調査を行った。この調査では、サンプル数は多くないが、生徒は SO や OO の中でも、前置詞残留が伴う文が苦手であるという傾向が判った。さらに、Yule(1998)で習得が最も難しいとされている SO パターンの文よりも、OO パターンの文に前置詞残留が伴う方が生徒は習得が出来ていないことが判った。

上記の調査に加えて、高等学校の検定教科書の中に出現する関係代名詞

を含む文を抜き出し、インプット量を調べた。この調査から判ったことは、教科書には OS や OO タイプの文に比べて、SS や SO タイプの文は出現回数が少ないことが判った。さらに、上記で述べた前置詞残留を伴う文に関しては、SS、SO タイプの文よりも出現回数が少ないことが判明した。

上記の調査結果と先行研究から、6 章では生徒が関係代名詞を習得するために不足していることを考察した。生徒が前置詞残留を習得できていないのは教科書のインプット量が少ない可能性があることが判った。

そこで第7章では生徒が関係代名詞を習得するために、まずは名詞句と文の違いを理解させる例を示し、導入時から後置修飾を徹底させる例を示した。また、関係代名詞を含む大きな名詞句を作る練習をさせ、それができるようになってから初めて文を作る練習をさせる必要があることを述べた。そして 5.1 で示した前置詞残留の習得に関して、疑問詞の定着から前置詞残留の定着を図る練習問題を示した。

最終的なまとめとして、関係代名詞を習得させるためには、関係代名詞を習得するためには、関係代名詞が後置修飾の一種であることを強調し、教科書のインプットだけではなく、教師が意識的に生徒が苦手とするタイプの文をインプットとして与えるべきである。特に、前置詞残留を伴う文は、Wh-疑問文の練習を通して、まず前置詞残留に慣れさせ、それから関係代名詞の指導につなげていく必要がある。教科書に載っている関係代名詞を含む文だけでなく、時間を作って演習をさせる必要があるだろう。

9 おわりに

この研究を通して、現在の高校生が関係代名詞についてどの程度理解をし、また習得できているか、ということが完全にではないにしろわかった。また、どのような点が不足しているか、または苦手であるかといった点も浮き出て来たほか、all の語順が判らない生徒が多かったなど、副産物的なものも得ることができた。そして何より、自分で長い間努力して書いたものを残せるという喜びを知り、研究することの大変さを知ることができた。

これから教員になるにあたって、関係代名詞以外の疑問点や問題に出会

うことになるであろうが、この研究を活かして、逃げずに問題解決に挑みたいと考えている。関係代名詞だけでもこれだけ多くのことがわかったので、その他の文法を研究したり、今までの指導法にこだわらずにより良い指導法を探す努力をこれからもしていきたいと思う。

参考文献

- Haegeman, L., & Jacqueline, G.(1999). *English Grammar* Oxford: Blackwell Publishing.
- Keenan, E., & Comrie, B. (1977). “Noun Phrase Accessibility and Universal Grammar.” *Linguistic Inquiry* 8, (pp. 63-99). Cambridge: MIT Press.
- Murphy, R. (2004). *English Grammar in Use*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Yule, G. (1998). *Explaining English Grammar*. Oxford New York: Oxford University Express.
- 金谷憲 (2007) 「文法の定着をめざして」『UNICORN JOURNAL November 10』
文英堂
- 風早寛 (2002) 『英文法・語法のトレーニング 必修編』 図書印刷株式会社
- 萩野俊哉 (2000) 『コミュニケーションのための英文法』 大修館
- _____ (2008) 『英文法指導 Q&A—こんなふうに教えてみよう』 大修館
- 中岡典子 (2006) 「英語教授法に関する一考察：関係詞節導入の実践例：第5回短期大学英语教育研究会事例発表より」 『東京立正女子短期大学紀要 34』 (pp.132-160).
- 大塚巖, 油井智子 (2004) 「関係詞の効果的指導法：節の機能に基づく指導順を中心に」 『金沢大学教育学部紀要. 教育科学編 53』 (pp.1-16).
- 佐藤ヒロシ (2005) 『超・関係代名詞マニュアル』 モリモト印刷株式会社
- 高橋一幸 (2011) 『成長する英語教師—プロの教師の「初伝」から「奥伝」まで』 大修館書店
- 高島英幸, 牧野由利子, 道丸敏 (1994) 「検定教科書の文法事項配列順序と第2

言語習得理論研究—中学教科書(平成5年度)における疑問詞と関係詞を中心—to」 『現代英語教育 2月号』 (pp.48-53). 泉屋書店
丹下省吾, 加藤剛, 高橋恵亮, 倉田有邦 (1962) 「関係代名詞の指導(I教科書同研究)」 『名古屋大学教育学部附属中高等学校紀要 7』 (pp.75-76).
安井稔 (1983) 『英文法総覧』 開拓社

引用教科書

市川泰男他 (2010) *UNICORN ENGLISH COURSE I* 東京: 文英堂
_____ (2010) *UNICORN ENGLISH COURSE II* 東京: 文英堂
_____ (2010) *UNICORN ENGLISH READING* 東京: 文英堂
霜崎實他 (2008) *CROWN English Series I New Edition* 東京: 三省堂
_____ (2008) *CROWN English Series II New Edition* 東京: 三省堂
_____ (2008) *CROWN English Reading New Edition* 東京: 三省堂
田辺正美他 (2010) *PROMINENCE English I* 東京: 東京書籍
_____ (2010) *PROMINENCE English II* 東京: 東京書籍
上地安貞他 (2010) *PROMINENCE English Reading* 東京: 東京書籍
南村俊夫他 (2010) *Voyager English Course I NEW EDITION* 東京: 第一学習社
_____ (2010) *Voyager English Course II NEW EDITION* 東京: 第一学習社
沖原勝昭他 (2010) *Voyager English Reading Course NEW EDITION* 東京: 第一学習社
原口庄輔他 (2010) *PRO-VISION ENGLISH COURSE I* 東京: 桐原書店
_____ (2010) *PRO-VISION ENGLISH COURSE II* 東京: 桐原書店
塩沢利雄他 (2010) *PRO-VISION ENGLISH READING* 東京: 桐原書店